

あ の と き

読 ん だ 、

現代作家による  
選書コーナー

【参加作家】

福田美蘭

吉澤美香

須田悦弘

目「me」

志村信裕

清水裕貴

あ の 本 が

THE BOOKS I READ AT THAT TIME

# あのとき読んだ、あの本が

千葉市美術館にゆかりのある6組の現代作家に、3冊の本を選んでいただきました。テーマは、子どものころ～若者のころに読み、いまでも影響を受けていると感じる本。これらの本と出会い、あの作品や、あの作品が生まれたのかもしれない。本がもたらすさまざまな刺激や、幼いころからつらなる作家の背景を、選書からお楽しみください。

## ARTISTS

### 参加作家

福田美蘭，吉澤美香，須田悦弘，目 [mé] ，志村信裕，清水裕貴

## DATES

### 期間

2021年10月～12月

※ 期間終了後も一部を除きアーカイブ配架予定

## VENUE

### 場所

千葉市美術館 4階 図書室（びじゅつライブラリー）

## ORGANIZER

### 主催

千葉市美術館

FUKUDA MIRAN

# 福田美蘭

## PROFILE

### プロフィール

1963年東京生まれ。1985年東京藝術大学美術学部絵画科油画卒業、1987年東京藝術大学大学院修士課程修了。1989年に新人洋画家の登竜門とされる安井賞を最年少で受賞、1991年第7回インド・トリエンナーレにて金賞受賞。

## BOOK SELECTION

### 選んだ本

#### 『パロマ天体写真集』

解説・編集：大沢清輝  
発行：地人書館 / 1977年

星や宇宙が好きだった小学生の頃、大版の見開きに広がる銀河や星雲の姿は神秘的で、その美しさとスケールの大きさに圧倒され、吸い込まれる様に飽きずに見ていた。

#### 『創作どうわ絵本4

#### ももちゃんねずみの くにへ』

著者：松谷みよ子 絵：堀内誠一  
発行：あかね書房 / 1967年

素朴な水彩が幻想的な話を暖かくテンポ良く進めて、むだなく明快に展開していく場面が深く心に残っている作品。

#### 『ムーミン全集 [新版] 1

#### ムーミン谷の彗星』

著者：トーベ・ヤンソン 訳：下村隆一  
発行：講談社 / 2019年 [新版]

トーベ・ヤンソンが描く挿絵の、今にも何かが起きそうな異世界の雰囲気は、日常を超えたどこかへつながる創造の力の、驚異と魅力を伝えてくれた。

YOSHIZAWA MIKA

# 吉澤美香

## PROFILE

### プロフィール

1959年東京都生まれ。1984年多摩美術大学大学院美術研究科絵画専攻修了。近年の主な個展に、「吉澤美香展 1990-2006」豊川市桜ヶ丘ミュージアム（愛知、2018年）、「去りゆく者にポテトチップスを」ギャラリー・アートアンリミテッド（東京、2021年）。これまでの主なグループ展に「第18回サンパウロ・ビエンナーレ」（ブラジル、1985年）、「Documenta 8」（ドイツ、1987年）など。1996年倫雅美術奨励賞受賞。多摩美術大学教授。

## BOOK SELECTION

### 選んだ本

#### 「小学館の学習図鑑 シリーズ」

動物の図鑑，鳥類の図鑑，  
魚貝の図鑑

発行：小学館 / 1956年初版

#### 「ドリトル先生シリーズ」 全13巻

著者：ヒュー・ロフティンク 訳：井伏鱒二

発行：岩波書店 / 2000年 [新版]

#### 『たのしい川べ ヒキガエルの冒険』

著者：ケネス・グレアム

訳：石井桃子 絵：E.H.シェパード

発行：岩波書店 / 2006年 [改版]

小3から中3までアメリカに在住、現地の公立校に通っていました。日本語に飢えていたのか、日本から持ってきた、または親せきを送ってくれた日本語の本を熟読しました。小学館の図鑑の手描きの図版は、今見ても生き物愛をかき立たせずにはいさせません。図鑑的なレイアウトはその後の制作にも影響があったと思います。

ドリトル先生シリーズは全巻10回ずつは読み返したと思います。中でも「航海記」と「月から帰る」が好きでした。「たのしい川べ」はプーさんシリーズも手掛けた E.H. シェパードの動物の挿絵が大好きでした。

SUDA YOSHIHIRO

# 須田悦弘

## PROFILE

### プロフィール

1969 年山梨県生まれ。1992 年多摩美術大学グラフィックデザイン科卒業。多摩美術大学彫刻学科客員教授。現在、東京在住。近年の主な個展に、「ミテクレマチス」ヴァンジ彫刻庭園美術館（静岡、2018 年）、毓繡美術館（台湾、2017 年）、千葉市美術館（2012 年）、クラクフ日本美術技術センター（ポーランド、2011 年）、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館（香川、2006 年）、「三つの個展」国立国際美術館（大阪、2006 年）など。

## BOOK SELECTION

### 選んだ本

『日本の美術 19  
茶室と露地』

著者：中村昌生

発行：小学館 / 1972 年

『大江戸百花繚乱展  
江戸の美学と好奇心』

編集：カタログ編集委員会

発行：NHK, NHKプロモーション / 1990 年

『金碧の花 重要文化財・  
妙心寺天球院襖絵展』

編集：サントリー美術館

発行：サントリー美術館 / 1991 年

美術関連だとこの辺かなと思います。

美術に目覚めたのが美大に行っていた頃だったので今につながる価値観や美意識をこれらの本から影響をうけ続けていると思います。

mé

# 目 [mé]

## PROFILE

### プロフィール

果てしなく不確かな現実世界を、私たちの実感に引き寄せようとする作品を展開している。手法やジャンルにはこだわらず、展示空間や観客を含めた状況、導線を重視。創作方法は、現在の中心メンバー（アーティスト荒神明香、ディレクター南川憲二、インストレーター増井宏文）の個々の特徴を活かしたチーム・クリエイションに取り組み、発想、判断、実現における連携の精度や、精神的な創作意識の共有を高める関係を模索しながら活動している。

## BOOK SELECTION

### 選んだ本

#### 『あいうえおうさま』

著者：寺村輝夫 絵：和歌山静子  
発行：理論社 / 1979年

「あいうえおうさま」は、王さまが、やり方はデタラメだけど、すべてのページで何かをやってるっていう絵本。失敗ばかりだけど楽しそうで、新しい遊びを考えて友達と遊びたくなります。(増井)

#### 『えのほん』

著者：日比野克彦  
発行：三起商行 / 2003年 [新装版]

「えのほん」は、日比野克彦さんの素敵な絵がたくさん描かれた本です。しかし、なんとその本は上から落書きしていいよっという本です！素敵な絵だからこそ手を加えたくなる、。時間を超えて線や形、それを描いた日比野さんの感覚とコミュニケーションできてしまうワクワクする本です。(南川)

#### 『のぼらの村のものがたり2 小川のほとりで』

著者：ジル・パークレム 訳：岸田衿子  
発行：講談社 / 1981年

「小川のほとりで」は、ねずみが暮らす小さな世界。見慣れた家具や食べ物で溢れかえって、慌ただしく日々を暮らしています。でもよく見ると一つの動作がどんどん連鎖して大きな世界に繋がっています。近くの私とすごい遠くをつないでくれる大好きな絵本です。(荒神)

SHIMURA NOBUHIRO

# 志村信裕

## PROFILE

### プロフィール

1982年東京都生まれ。2007年武蔵野美術大学大学院映像コース修了。2016年から2018年まで文化庁新進芸術家海外研修制度により、フランス国立東洋言語文化大学 (INALCO) の客員研究員としてパリに滞在。身近な日用品や風景を題材にした映像インスタレーション作品から、近年では各地でのフィールドワークを元に、ドキュメンタリー的手法を取り入れた映像作品を制作。近年の主な個展、プロジェクトに「游動」(KAAT 神奈川芸術劇場、2021年)、「つくりかけラボ 02 志村信裕 | 影を投げる」(千葉市美術館、2021年)、「千葉の新進作家 vol.1 志村信裕 残照」(千葉県立美術館、2019年)など。現在、千葉県香取市を拠点に活動。

## BOOK SELECTION

### 選んだ本

#### 『NARA NOTE』

著者：奈良美智

発行：筑摩書房 / 2001年

#### 『既にそこにあるもの』

著者：大竹伸朗

発行：筑摩書房 / 2005年

#### 『余白の芸術』

著者：李禹煥

発行：みすず書房 / 2000年

アーティストという「答え」のない生き方に憧れていた美大生時代の僕は、同時代に生きるアーティスト達が日々どんなことを考えながら制作しているのか知りたくて仕方がなかった。だから彼、彼女らが書いた本をここでは挙げきれないほど、むさぼるように読んできた。常識を疑い、誰のマネもせず、唯一無二のアート作品をつくりつづける本物のアーティストが記す言葉は、作品と同じようにユニークだし、「つくるこ

と」が「生きること」とまったく等しく結ばれていることが分かるだろう。約15年前、僕がこれらの本から教わったとっても大事なことだ。アーティストの本がもっともっと読まれる社会になったらいいなと思う。

SHIMIZU YUKI

# 清水裕貴

## PROFILE

### プロフィール

1984年千葉県生まれ。写真家・小説家。武蔵野美術大学映像学科卒。土地の過去や伝説をリサーチし、物語を立ち上げ、写真と文章で表現している。2011年1wall グランプリ受賞。2016年三木淳賞受賞。2018年から小説の執筆を始め、新潮社のR-18文学賞大賞受賞。2019年に単行本『ここは夜の水のほとり』を出版。同年、船橋にアトリエ兼ギャラリー「tidepool429」をオープン。地元鎌ヶ谷の謎の空き地を探る作品をPGIで発表。2021年、神谷伝兵衛稲毛別荘で硝子と黴の物語を展示。千葉市美術館エントランスギャラリー、千の葉の芸術祭「CHIBA FOTO」で作品を発表。

## BOOK SELECTION

### 選んだ本

#### 『アフターゼロ』 全7巻

著者：岡崎二郎

発行：小学館 / 2010年

#### 『第四間氷期』

著者：安部公房

発行：新潮社 / 2012年 [改版]

#### 『攻撃 悪の自然誌』

著者：コンラート・ローレンツ

共訳：日高敏隆，久保和彦

発行：みすず書房 / 1985年 [新装版]

現実社会に科学と空想が溶け込む SF 短編集

「アフターゼロ」

予言機械が語る未来の水棲人の世界

「第四間氷期」

人間以外の脊椎動物の闘争と儀式を描いた

「攻撃」

全て、ノストラダムスによって世界が終わると予言されていた 1999 年までに出会った本です。

子供の頃は心の片隅で、本当に今の世界が突然消え失せて、善悪の判断がつかない未来が圧倒的な「モノ」として目の前に現れると思っていました。だから私は必死に世界の秘密への扉を探し回っていました。あれから二十年以上経っても世界は変わらず、割と気楽に暮らしてますが、まだ見えない扉を探し回っています。

あのとき読んだ、あの本が

編集：庄子真汀（千葉市美術館）

デザイン：降矢恵里（千葉市美術館）

発行日：2021年10月16日

発行：千葉市美術館



千葉市美術館